

書評：

『学校トラウマの実際と対応 児童・生徒への支援と理解』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学認知行動療法研究所 公開日: 2021-04-09 キーワード: 作成者: 辻, 恵介 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1549

■ 書評

『学校トラウマの実際と対応 児童・生徒への支援と理解』

誠信書房, 179頁, 2,400円(税別), 2020年8月刊, 藤森和美 編著

辻 恵介
武蔵野大学人間科学部人間科学科

子どものこころの問題は、いろいろな要因が複雑に絡み合い、一筋縄で行かないことが多い。家庭が拠り所として機能しないことも珍しくなくなってしまった。保護者が家庭的・職業的・社会的に適応できていなかったり、保護者自身もなにか深刻な問題を抱えていたり、キーパーソンになれる人物がいなかったり、これは大変だと思わせる家庭が確実に増えている。また、いわゆる“普通”の家庭でも、一皮剥けばいろいろ問題が顕わになり、子どもの危機に対処する力の乏しさを露呈することが少なくない。この状況は多かれ少なかれ誰もが感じているのに、効果的な解決策は今もって打ち出せておらず、われわれは重苦しさを味わい続けている。

家庭とともに子どもの拠り所になるべき学校も、さまざまな問題を抱えていて、いじめ・体罰・その他もろもろ、学校自体が子どものこころの問題の原因のひとつになる場合もあるし、教職員の人材不足は深刻で、その不足している人材が仕事に追われ疲弊している。さらに、発達の偏りを始めとした生き辛さを抱える子ども自体も増えているし、われわれの社会は彼らが生きやすい場所ではなく、手詰まり感はここに極まる。

チーム学校という概念が登場したのは、従来からの学校の教職員だけでは手が足りず、人的資源をかき集めなければ埒が明かなかったからだろうし、子どものこころの問題の背景が複雑に絡み合っていて、多職種を投入しなければもはや問題の解決が図れなくなったからだろう。そんな状況にもかかわらず、あるいはそんな状況だからこそ、公認心理師や臨床心理士になって学校現場で子どものこころの問題に関わりたいという大学生や大学院生が大勢いてくれて、われわれは一抹の希望を見出すことになる。また、日々の業務で忙殺されている学校教員や養護教諭、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーら諸氏が、抱えている事例の解決のために日夜研鑽を積み重ねられていることには、本当に頭が下がる。

そうした方々から、なにかよい本はないですかと尋ねられたとき、真っ先に推薦できるのが本書である。学校での子どものこころの問題を俯瞰した上で、さまざまな問題への対応をわかりやすく説くだけでなく、現場経験が豊富な執筆陣が挙げている事例は、どれも非常に示唆に富んでいる。初めから読み進めてもよいし、対応に困っている問題に関連した章から開くのもよいだろう。執筆陣はベテランから若手まで多岐に亘り、全国のさまざまな組織に所属されているが、いずれもそれぞれの第一線で活躍されている方々ばかりである。こうした顔触れを集められるのは編著者の真骨頂であり、まさにチーム学校ならぬ『チーム藤森』の面目躍如の一冊と言えよう。